

「京都大学公共政策大学院での 学生生活を振り返って」

はじめに

二〇一五年四月に始まった、京都での大学院生生活も残すところ半年となった。四年間の学部生生活同様に濃密だったこの生活も、そろそろ終わりを迎えようとしている。自主活動や就職活動、怒涛のように過ぎた学生生活から果たして何を得られたのか。本稿ではそれを見つめ直してみたい。

一般的に、理系の学生とは違って、文系の大学院へ進学する学生は珍しいと言われる。文系大学院といえば、法曹界に入るものを養成する法科大学院やMBAを取るための経営管理大学院、さらには哲学、心理学といったメジャーな学問の大学院というイメージが固定化している反面、その他の文系大学院のイメージが定着していないからである。ましてや、日本国内にそういくつもない「公共政策大学院」となれば、一般的に何をしているのか想像しがたいものがあるだろう。

では、「公共政策大学院」での学びを通じて、私はどのように変わることができたのだろうか。この問いに対して、「視野（価値観の物差し）」と「人とのつながり」という二つの視点から考えてみたいと思う。

視野

本節では、私の価値観が本学における学びの中でどのように変化したかを論ずる。価値観という言葉は多義的であるが、ここでは職業観、つまり「仕事についての価値観」を中心に据えて論を進めたい。なぜなら、研究型大学院ではない本学において、いかなる職業に就くかという問題は切っても切り離せないからである。

私が本学に入学しようと決めた理由は次の二つである。第一に、外交官試験の勉強をする中で、ひたすら暗記するだけの勉強に疑問を持ち、知識を詰め込むだけの学習ではなく、（そうしてインプットした知識を活かした）より実践的で、将来に役立つような学習をしたいと思ったからだ（それは甘い、忍耐力不足だというツツコミは許してください）。第二に、四年間慣れ親しんだ仙台の地ではなく、自分に全く縁のなかった京都という新たな土地に行ってみたかったから（結局自分探し

かよ、というツツコミは本当許してください、ごめんなさい）である。こうした理由で私は本学に入学したが、今になって振り返ると狭い視野で行動していたように思う。すなわち、入学時の私にとっては、外交官という選択肢が絶対であり、それ以外の選択肢は眼中になかったのだ。恥ずかしい話、

学部時代は全く民間の就職活動をせず、外交官試験一本に絞っていた。「自分にはこの職業しかない！」と他の職業との比較もなく決めつけていたのである。本学に入学するまでの私は「視野狭窄」に陥っていたといっても過言ではない。比較を怠っていたがために、のちに外交官という職業への理解の甘さを痛感することになったのだ。実際に外交官とともに仕事をしたことのある社会人学生との会話で、「国と国を繋ぐ」という華やかな外交官像が、「泥臭く地道に国内外の利益を調整する」という外交官像へと変わった。

このように狭い視野を広げてくれたのが、本学での社会人学生や同世代学生との会話である。まず、社会人学生との会話では、これまでとは異なる国家公務員像を知ることができた。国家公務員といえば「国を変える職業、国民のために働ける職業」というイメージがあるが、これが必ずしも正確ではないと感じる場面が社会人学生とのやり取りの中で何度もあった。確かに制度設計は国家公務員が行うが、それらを実行に移していくのは地方公務員、民間企業といった組織、そして個々の国民である。つまり、「国を変える職業、国民のために働ける職業」というのは、必ずしも国家公務員のみには当てはまるものではないのだ。また、行政の体制

上、国民ニーズに対して迅速な対応が取り得ないことも知ることができた。つまり、「国を良くしたいから、社会課題を解決したいから」という欲求と、国家公務員を直結させてしまうのは論理に飛躍があるといえるだろう。他方で、民間企業で働くことについてのイメージを持つこともできた。インフラ系企業やコンサルティングファーム、政府系機関など、様々な職場での実体験を聞き、「人生という長期的スパンで考えたときの仕事の意味」を学部時代とは比較できないほど意識させられた。例えば、近年ワークライフバランスという言葉がしきりに各方面で叫ばれている。この言葉は家庭、プライベート、健康、仕事、居住地など様々な要素を含んでいる言葉であり、一義的に捉えることができない。だからこそ、学生のうちに社会人としての経験が豊富な方々から、こういった話を聞いたことは実りの多いものだった。

次に、同世代学生との会話では、(上記と重複するところもあるが)自らの職業観を内省し、掘り下げることで、志望動機やその原体験を話す中で、これまで出会ったことのないバックグラウンドを持つ同世代の学生から多くの指摘をもらい、考えを深めさせられた。夜通し、同期と議論していたことが思い出される。個人情報にあたるため詳細には書けないが、学部を卒業してそのまま就職していたら出会えなかったであろう経歴を持つ友人に出会えた。大げさな言い方になるが、多くの人の、それぞれ個性的な人生の遍歴を聞いた(追体験できた)ことで、自分とは異なるものに対してより寛容になれるようになったと思う。

また、九期生から言われた一言をきっかけに、本格的に自己分析に取り組んだことも貴重な経験となった。二〇一五年十月に、省庁に内定した先輩から「君、伸び代ないよね。霞が関は成長性ないと入れないよ。」というような趣旨のことを言われた。今考えれば、内定者の漠然とした言葉を真に受けた自分が悪いのだが、将来について本格的に不安だった時期に、生来の気にしやすい質もあり、大きな衝撃を受けた。

そこで、自分とは何か、どんな人間なのか、そしてどこを目指しているのかを本格的に知ろうとした。いわゆる自己分析であるが、それを十分に行うのは簡単ではなく、多くの時間を費やした。同期の助けを得て、幼少期から現在までの自分を見つめ直した。親や友達との関わり、仕事に求めることなど、可能な限り多くの視点から自問自答を繰り返した。自らの過去を原因論的ではなく、目的論的に解釈していく。

そうすることによって、逆説的に現在の自分を掴めるのだ。大それたことを言ったが、結局のところ自分の輪郭をぼんやりとは掴んだが、「これこそ自分だ」という明確な自分像は得られなかった。

しかし、こうした自己分析を通じて、自分自身を肯定できるようになったのは紛れもない事実である。そして、見つけられなかった明確な自分像を探求していく姿勢が身についた。これも私が変わったことの一つだと思う。こうした自己分析の結果、当初の「外交官至上主義」とでもいうべきものが崩れ、他省庁や民間企業といった様々な職業に目を向けられるようになった。国家公務員を受けずに、常に自らのキャリア、価値を問い続けられるコンサルティングファームに就職を決めたのは、上記のような経験があったからだと思う。社会人経験がないながらも、職業について少しは柔軟に考えられるようになったのではないだろうか。

人とのつながり

二つ目の観点である、人とのつながりについて考える。私にとって、人とのつながりの何が重要だったのか。それは次の三つである。同年代の同期の学生と出会えたこと、社会人学生と職業観や人生の話ができたこと、そして本大学院以外の学生との出会いである。まず、バックグラウンドの違う学生と出会えたことについて。哲学を勉強していた自分にとって、経済や法律を勉強してきた学生との会話は、これまでの自分の物事の考え方に新たな視点を加えられるような刺激的なものだった。哲学は主に抽象度の高い議論をするのに対して、法律や経済などは具体的で、実学的な議論を好むからである。両者の良し悪しを論じるつもりはないが、前者に慣れていた自分には後者の議論はなかなか難しい点があった。

次に、社会人学生と職業観やその人の人生について話せたことについて。社会人になるとどのようなことか、社会人の方々とこうした話ができたのは、自分の考えを改めることにつながった。就職がゴールではなく、そこからがスタートであって、ただ入りたい企業に入ることだけを目的に就職活動を行うべきではないことを学んだ。また、転職についての講演を聴けたこ

とも大きかった。何を考えて新卒として就活し、就いた職業でどう考え、何を心得て転職に至ったのか、転職は自らにとってどんな意味を持つのか。終身雇用が崩壊し、「仕事」が一義的に捉えられなくなりつつあるこの時代に社会に出る自分にとって、「何が自分にとって大切なのか」を真剣に考える機会となった。かつて日本人は「就職」

するのではなく「就社」と言われてきた。それが瓦解しつつある今、なぜ働くのか、働く上で大切なことは何か、そういったことを今まで以上に自らに問う必要があることを痛感させられた。

最後に、公共政策大学院以外の学生との出会いがある。これは自主活動の具体例とともに次の節で述べることにする。

アジア公共政策研究会を例に

私が入っていた自主活動の一つに、アジア公共政策研究会というものがある。公共政策大学院の自主活動の中で、唯一、他の京大の大学院とのつながりがある自主活動で、他研究科の留学生

が参加している。十期生の有志が、本学の国際化を目的に立ち上げたものである。

この自主活動から得たことは、まず、この自主活動で出会った留学生の優秀さに圧倒され、危機感を覚えたことである。月並みな表現で恐縮だが、受けた衝撃は大きかった。実際に自分がそのような状況に遭遇してみると、思うところは大きい。語学的な差はもちろんのことであるが、とりわけ歴史への造詣の深さに驚かされた。日本史について議論している中で、日本人側が留学生よりも自国のことを知らなかったことは今も忘れることができない。彼らは韓国併合と、その後の日本の統治の構図を、現在のシリア情勢に当てはめ、それを読み解いていた。つまり、歴史を単に知識として留めておくのではなく、ツールとしてそれを使いこなしていた。国際化が叫ばれる今だからこそ、自分たちのルーツとなる歴史を学ばなければ、国際化などと言っていられないのではないだろうか。自分の未熟さを知り、もっと自己研鑽しなければならぬと痛感した。

次に、本自主活動で現役の外務省職員の方をお招きして行った講演会及び意見交流で得られた知見である。現役外交官の口から、相対的に見た霞が関の様子や民間企業との関わりが聴けたことは、国家公務員と民間で揺れていた自分に多くの示唆を与えてくれた。霞が関での働き方と、民間企業の働き方を比較して、霞が関の改善点を「一人の官僚」の目を通じて示してくれたのである。

また、組織運営という視点からもこの自主活動は自らを反省する機会を与えてくれるものだ。組織の中で自分の未熟さを教えてくれたからだ。まず、組織の運営について他のメンバーに頼りきりになってしまった時期があったことである。本自主活動はなかなか参加者を確保できず、方向性を見失う時期があった。そのため、メンバーで対策のための会議が何度開かれたのだが、自分が忙しいことを理由にあまり参加できず、対策を他のメンバーに任せてしまった。自らもメンバーである以上、果たすべき責任があるにも関わらず、それをしなかったの

である。自分の無責任な部分は改善していかなければならない。第二に、割り振られた仕事を適切かつ迅速に処理できなかったことである。手際の悪さ、処理能力の低さといった部分も、今後社会人になるにあたって直していく必要がある。このように、組織における自分の改善点というものを直視することができた。

この自主活動から、以上のようなことを私は学ぶことができた。そして、それを学ばせてくれる良き友人に出会えたと思う。

最後に

ここまで、視野と人とのつながりという二つの視点から、私の公共政策大学院での生活を振り返ってきた。これといって知識が大きく増えたとは思わないが、多くの視座やつながりは獲得できたのではないかと思う。それほどに濃い二年間だった。

最後になるが、私にこのような機会を与えてくれた家族、そして京都大学公共政策大学院という場を通じて出会えた学友、教授、先輩に深謝をしたい。